

ペナン日本人学校における現地理解教育の取り組みについて

前ペナン日本人学校 教諭

石川県金沢市立森本中学校 教諭 田 畑 良 夏

キーワード：在外教育施設、ペナン日本人学校、現地理解教育

1. はじめに

平成27年（2015年）から3年間、マレーシアにあるペナン日本人学校で勤務させていただいた。マレーシア・ペナン島は、マレー半島の西方、マラッカ海峡に位置する東西約12km、南北約24kmの亀の形をした島であり、対岸のマレー半島部分バタワースと合わせて、ペナン州を構成している。人口は約70万人で、主にマレー系、中国系、インド系、その他の民族などによって構成されている。マレーシアは多民族国家で、ペナン島においては特に中国系マレーシア人の割合が多く、街を歩いていても、中国系マレーシア人と間違えられて中国語で話しかけられる事が非常に多かった。



2. ペナン日本人学校について

ペナンでは、なんと在留日本人が約3,000人もいる。ペナン日本人学校（Penang Japanese School: 以下PJSと略す）に赴任が決まった時は、「マレーシアの島」と聞いて、社会の資料集に出てくるような熱帯雨林の中に高床式の家で生活をする原住民を思い浮かべていた。しかしペナンは「東洋の真珠」と呼ばれる国際的な観光都市であり、近年は特に中東の人達に人気のリゾート地である。日本人学校のあるジョージタウンは、2008年にマラッカとともに世界遺産に登録され、イギリス植民地時代の建物や、マレー系、インド系、中国系の建物が融合した街並みが、多くの観光客を惹きつけている。そしてペナンには、百円ショップや日系大型ショッピングセンターがあり、日本食も手に入る。

そんなジョージタウンの一角にあるPJSは、小学部児童126名、中学部生徒28名、計154名（2018年1月現在）の小中一貫校である（文科省からの派遣教員12名、財団からの派遣2名、ローカルスタッフ12名）。小学部の教員が中学部の授業を担当したり、中学部の教員が小学部の授業を担当したりして、全職員で全児童生徒を見守っていきけるアットホームな学校である。日々の清掃活動や運動会などの行事では、小学部中学部一緒に活動し、中学部がリーダーとなって活躍する場面も多い。授業は日本の教育課程を基本とし、その上でマレーシアの特色を生かした英会話やマレー語講座、現地理解教育として修学旅行、校外学習、交流会などがある。また小1から週1時間、国語とは別に書写の時間が設けられ、日本の文化を大切にする教育実践もなされている。

3. 修学旅行について

(1) 目的

PJS 中学部2年生は、3泊4日の修学旅行を実施している。総合的な学習の時間や英語の授業を活用し、事前学習や当日の活動、そして事後の振り返り等を行う。行き先については、平成26年までの数年間はボルネオ島にあるマレーシア・コタキナバルへ行き、自然体験を中心とした活動を行っていたが、地震等の現地事情により、平成27年はタイ・チェンマイへ、そして平成28年よりマラッカ、クアラルンプールへと行き先が変更された。私が中学部2年生の担任として実施した平成29年度の校外学習の目的は以下の通りである。

- ① 集団生活を共にすることで交流を深め、望ましい人間関係を形成し集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してより良い学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。
(ペナン日本人学校 学校目標『かがやき』の『や』やさしい子『き』きょうりよくする子)
- ② マレー文化に触れることで、歴史や文化などの現地理解を深めると共に、異文化理解学習として生徒の寛容性、社会性を培う。(ペナン日本人学校 学校目標『かがやき』の『か』かんがえる子)

(2) 活動内容

<p>1日目 ペナン→マラッカ</p>	<p>マリンドエアー便でペナン島出発 昼食 Tim Ho Wan (飲茶セットランチ) リパークルーズ マラッカ市内観光 ババニョニヤヘリテージ→カンポンクリンモスク→ 青雲亭→オランダ広場→セントポール教会→サンチャゴ砦→ 海辺のモスク 夕食 セリニョニヤ (ニョニヤ料理)</p>	 <p>マラッカ海峡に浮かぶモスク</p>
<p>2日目 マラッカ→ クアラルンプール</p>	<p>バスでカンポン村へ ゴム園、パームオイル園、ココナッツ園の見学と体験 各ホストファミリーの家庭でマレー異文化体験 各家庭にてマレー料理の昼食 バスでクアラルンプールへ MaTiC (Malaysia Tourism Centre) にて伝統舞踊ショー見学 クアラルンプール市内観光 国立博物館→独立広場→旧連邦事務局→ツインタワー 夕食 客家 (スチームボート)</p>	 <p>パームオイル園での作業体験</p>
<p>3日目 クアラルンプール</p>	<p>バスでプトラジャヤへ 最高裁判所→プトラジャヤ開発公社→鉄モスク→ 首相官邸→ピンクモスク 昼食 プトラジャヤシーフード (シーフード料理) バトゥ洞窟見学 マレー料理クッキング教室 夕食 (ナシレマ)</p>	 <p>バトゥ洞窟にて</p>
<p>4日目 クアラルンプール→ ペナン</p>	<p>ジャディバティック バティック制作体験 KLセントラル駅到着 マレー鉄道でバタワースに向けて出発 フェリーでペナン島に向けて出発</p>	 <p>バティック絵付け体験</p>

(3) 修学旅行を通して

全ての行程に、マレー系中国人ガイドが同行し、日本語と英語で見学、体験を行った。彼は、日本の大学に留学経験があり、日本語、マレー語、英語、中国語の4カ国語を話すことができる。マレーシアでは、公用語としてマレー語が推奨されているが、マレー語、英語、中国語、ヒンドゥー語を主とする多言語国家である。日常生

活において、基本的に英語は通用するが、すべての人が英語を母語としているわけではないので、ショートホームステイ体験をしたカンボン村ではマレー語しか通用しなかった。そこで生徒達は、現地（Universiti Sains Malaysia: USM）大学の学生や本校のマレー系のESL（English as a Second Language）教諭から、マレー語講座を受講してから、ホストファミリーと交流した。クーラーや水洗トイレなどが設備されていないマレー人の田舎の暮らしに、子ども達は驚いていた。

世界遺産都市であるマラッカでは、オランダ統治時代の建造物やニョニャババ博物館を見学したり、マラッカ海峡に浮かぶモスクを訪問したりした。ニョニャババとは、中華系の男性がマレーシアへ移住してマレー系の女性と結婚し、生まれた女の子がニョニャで男の子をババと言う。ニョニャが作り出した料理は、ニョニャ食器と呼ばれるピンクや黄色の色彩豊かな食器に並べられ、ニョニャ料理として親しまれている。ニョニャ料理を始め、中華料理、マレー料理などを旅行中に食事できた事も、多民族文化理解への一助となった。

4. 現地校との交流会について

(1) 目的

PJSでは、毎年1回、現地SMK（国立の中等教育学校）プキジャンブル校（以下SMKBJと略す）との交流会を実施している。各年で、お互いの学校を訪問し合い、ホスト校が自国の文化を紹介したり体験してもらったりするプログラムを企画する。平成28年はSMKBJを訪問し、マレーシアの遊びを体験させてもらった。平成27年、平成29年はPJSがホスト校として、SMKBJを招待した。私が中学部主任として実施した平成29年度の交流会の目的は以下の通りである。

- ① 現地校の生徒と英語や日本語を用いて進んで関わり、コミュニケーション能力を高める。
（ペナン日本人学校 学校目標『かがやき』の『や』やさしい子）
- ② 交流を通して、日本文化を伝えたり、マレーシアの文化についての理解を深めたりする。
（ペナン日本人学校 学校目標『かがやき』の『き』きょうりよくする子）

(2) 当日の活動内容

- 9:00 SMKBJ、日本語専攻生徒約30名、PJSに到着
- 9:15 体育館にてオープニングセレモニー
それぞれの代表生徒による挨拶（日本語と英語）
校長先生による挨拶
日程の説明

SMKBJとPJS生徒同士のバディーを作る
- 9:40 文化交流・体験学習
3つのブースを回って体験学習（書道ブース、和太鼓ブース、漫画・アニメブース）
- 11:20 クロージングセレモニー
PJS代表生徒から挨拶とソーラン節の披露
SMKBJからの伝統の歌や踊りの披露
おみやげ交換（和紙で作ったコースターを作成）
- 12:00 SMKBJ、PJSを出発



和太鼓ブースでの様子

(3) 体験を通して

まず、交流会を実施するにあたって、PJSの生徒達にどんな日本文化を紹介したいかを考えさせた。すると真っ先に挙がったのが、「漫画・アニメ」である。もちろん、書道や華道、和太鼓といった歴史のある日本文化もあ

るが、マレーシアの若者の間では日本の「漫画・アニメ」がとても人気である。日本人会主催の盆踊り大会でも、お気に入りのアニメキャラクターをコスプレする若者が多くいたり、マレーシアで日本語を専攻する学生の専攻理由が「漫画・アニメ」に影響されている。一度、ペナン州の州知事に日本人学校の1年のカリキュラムを紹介する機会をいただいたが、その時にも「漫画やアニメは勉強しないのか」と冗談で言われる程であった。「漫画・アニメ」ブースでは、日本の漫画・アニメの歴史や登場人物を紹介したり、カルタをしたりしたが、もちろんSMKBJの生徒にも大好評であった。今や、漫画やアニメは世界に誇れる日本の文化である事を実感した。

体験をするにあたって、考慮すべき事がある。それは、マレー系の学生への配慮である。敬虔なイスラム教徒である彼らに対して、男子と女子のバディーにならないようにする事、PJSの女子生徒はできるだけ肌の露出を抑える事、女子トイレは和式で、ホースとバケツを用意しておく事などである。マレーシアのトイレ事情も変わってきているようであるが、マレー人は、壁に設置されたホースから出る水またはバケツの水で、トイレトペーパーを使わずに、手で器用に洗うらしい。マレーシアのトイレの床はびしょ濡れのことが多いのは、そういう理由からであったと、PJSの生徒達も納得していた。

5. 現地理理解教育を通して

PJSでは小学部3、4年生社会科副読本「わたしたちのペナン」とPULAU MUTIARA（プラウ ムティアラ）という学習資料がある。それぞれ教科書改訂や時代の移り変わりに合わせて改訂されてきた先輩方の努力の結晶である。私は、この副読本を中学部の英語科や総合の時間でも活用させていただいた。現地理理解教育をすすめるにあたっては、まずは教師である私自身がマレーシアの事、ペナンの事をよく知らなければならないと思う。赴任1年目から、こうした先輩方の残してくれた遺産を利用する事で、3年という短い赴任期間の中で充実した現地理理解教育をすすめる事ができたと思う。

PJSの子ども達も、ペナンに住んでいながらマレーシアの事、ペナンの事をあまり知らない。スクールバスで登下校し、日本人の生活圏が限られているので、地域のコミュニティーや、家族などからの情報を得にくい環境にもある。今後も、こういった子ども達が、現地理理解教育を通して視野を広げ、PJSの校歌にあるように、「明るい未来を夢にみて」世界に羽ばたいていくことを期待している。